

# 浜松・高林家住宅の建築・家具・外構とその成立要因に関する総合的 研究 民藝運動の展開と地方民家の近代化の実像として

A Comprehensive Study of the Architecture, Furniture, and Exterior of the Takabayashi Residence  
in Hamamatsu and the Factors Contributing to its Establishment

The Development of the Mingei Movement and the Modernization of Local Residence

常葉大学 教授 土屋和男

## （研究計画ないし研究手法の概略）

1927(昭和2)年、静岡県浜松市の高林家当主・高林兵衛を、民藝運動の提唱者、柳宗悦が訪れた。以来、高林は民藝の支援者となり、翌年の御大礼記念国産振興東京博覧会「民藝館」(以下、「民藝館」)の建設に関わり、続いて1929(昭和4)年には邸内に民藝の作家と共同して主屋を建設した。さらにそれまで住居としていた旧主屋を解体し、その古材を用いて「田舎家」を建設した。この「田舎家」は1931-33(昭和6-8)年に「日本民藝美術館」として使われた。

現在、高林家には主屋、田舎家の他、屋敷構えが一体として残っている。14棟が登録有形文化財となり、川島智生らによる建築史的な考察もあるが、いずれでも図面は明らかにされておらず、所蔵史資料についても検討の余地がある。

本研究は、高林家住宅の研究を通して、近代日本住宅史上における民藝運動の実態を、地方民家の展開との関係から明らかにすることを目的とする。具体的には以下の3点について調査・研究を行う。

1. 高林家住宅の実測調査および図面作成
2. 高林家住宅の建設経緯の分析
3. 高林家住宅のデザインの分析

また、これらを明らかにするために、関連・類似物件の実地調査を実施した。以上によって高林家住宅の歴史的な位置づけを行うとともに、質の高い住環境と生活文化の実践例を明らかにした。

共同研究者は、内田青蔵(神奈川大学建築学部・教授)、小沢朝江(東海大学建築都市学部・教授)、植田道則(静岡文化芸術大学デザイン学部・教授)である。



高林家 主屋



高林家 田舎家

## （実験調査によって得られた新しい知見）

1. 高林家住宅の実測調査および図面作成

図面は配置図、平面図のみがあったが、他の図面はなく、本調査によって主屋と田舎家について立面図、断面図、展開図を作成した。また庭園、外構の実測も部分的に行った。本研究者の大学関係の他、先行して登録有形文化財申請時に配置図、平面図の調査・作図を行っていたNPO法人静岡県伝統建築技術協会と協同して実測、作図を行った。成果は以下の文中に掲げる。

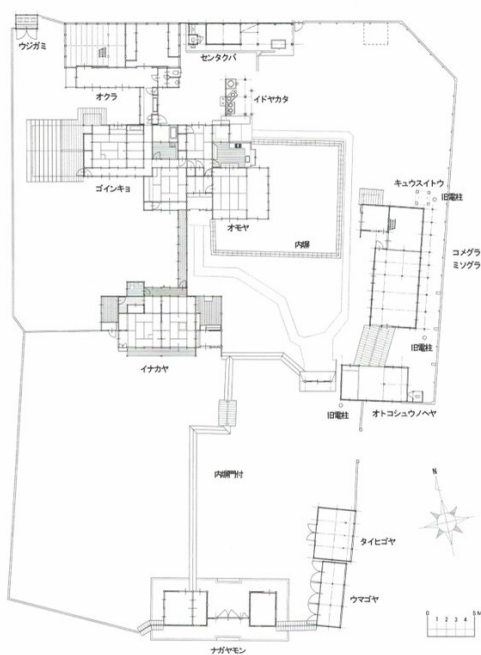
2. 高林家住宅の建設経緯の分析

高林家には明治期の4枚の家相図が伝わる。いずれも旧主屋が中央に描かれ、間取りや柱位置が付属建物を含めてわかる。これらを比較し各図における変遷を見るとともに、現状

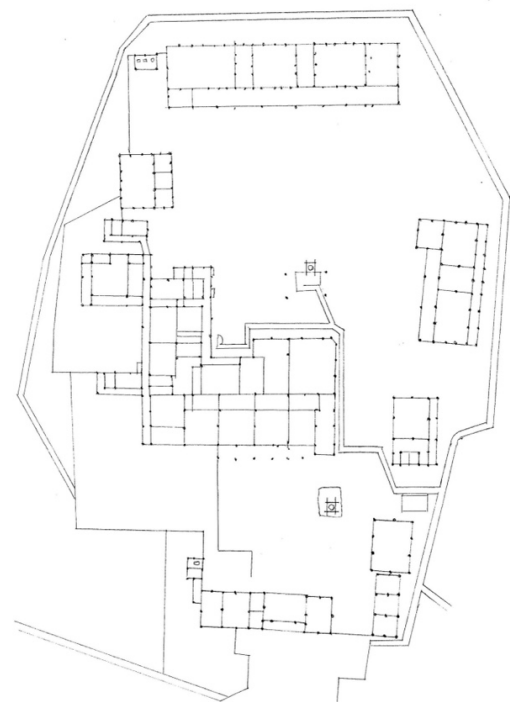
との照合を行った。新旧主屋の位置関係は、旧主屋の背後、蔵との間に新主屋が建っており、新主屋の建設と旧主屋の解体は昭和初期の数年の間に進められたと推測される。田舎家は現在、主屋の南側に渡り廊下で接続され、南向きで建っているが当初は現在位置の南東に東向きに建っていた。田舎家は「日本民藝美術館」の閉館後、現状の位置と向きに移動し同時に建物も一部改変されたと考えられる。その過程は次のようなものである。

- 1) 文庫蔵、米蔵、道具倉の一部を取り壊すとともに、残す部分を北西に曳く(現状の蔵)
- 2) 旧主屋の離れ座敷を曳く(現状の「隠居」)
- 3) 「隠居」に接続して、新主屋を新築する(昭和4年上棟：棟札)(移り住む)
- 4) 給水塔、外塀を新築する
- 5) 旧主屋を解体する
- 6) 旧主屋跡地に田舎家を東向きに新築する(昭和6年)
- 7) 田舎家を「日本民藝美術館」とする(昭和6-8年)
- 8) 田舎家を南向きに回転させ、やや北東に移動する
- 9) 田舎家に床の間等を付加し改修する
- 10) 塀、平常門、内塀を新築し、平門は旧建物を再利用する(8-10は昭和8-12年頃)

高林邸では昭和初期の数年間に大きな改変が行われ、特に居住部は一新された。「民藝」の意匠による近代住宅を新築し、巨大な民家であった旧主屋を解体し、旧主屋の古材を利用した「田舎家」をつくる、という一連の過程があった。代々続いてきた古い家を解体し、近代住宅に住み替えるには相当の決意があったと思われる。当主、高林兵衛の住宅に関する強い意志が見て取れる。兵衛は時計を蒐集していたことから、「時の記念日」を定めた生活改善同盟会と交流があり、近代住宅の知見に触れる機会があったと考えられる。「民藝」との直接の関わりは柳の訪問によるが、この時期に近代住宅への住み替えを計画しておりそれに「民藝」の意匠が加わることにより、主屋と田舎家が実現したと考えられる。



配置・平面図



明治39(1906)年 家相図より抽出

年	M19	M30	M19,35	M19,39	昭和初期	現状
家相図作製年書込	明治十九年六月 武分ヲ老間卜定メ此圖ヲ調製ス	三十年二月東京行之時調製ス	武分ヲ老間卜定 明治十九年六月調 明治三十五年五月和議之処ヲ改ム	明治拾九年二分老間卜定メ調製之繪圖面ヲ後ニ改マリ口所ヲ明治三十九年八月改メ	(主屋S4(棟札)、田舎家S6(推定)ほか)	(E30, R3年登録時)
建物名称	書込あり	書込あり	書込なし	書込なし		
付属域						
外塀		〃	南東、北西(主屋北西の増築に伴う)区画変	〃	新築	(家相図とは全面異なるが北東、北の区画は一致)
長屋門	「表門」「隠宅」	〃「表門」「隠宅」	〃	〃	〃	隠宅部分と便所なし 位置ほぼ変更なし
馬小屋	「土肥部屋」	〃「土肥部屋」	〃	〃	〃	位置、大きさとも変更なし
堆肥小屋	「雪隠」	〃「雪隠」	〃	〃	〃	位置、大きさとも変更なし
平常門 平門、塀	「平常門」「平門」	〃「平常門」「平門」	〃	〃	新築、平門のみ旧建物を再利用か	(家相図にも類似の区画あり)
居住域						
男衆部屋	「厩」	〃「厩」	〃	〃		90°回転、大きさ変更なし
旧主屋	(土間、南4部屋、北・西6部屋)	〃	北西に増築(隠居)	〃	解体	増築部のみ北に曳家され「隠居」現存
主屋・隠居					新築	(旧主屋より北に位置)
給水塔					新築	(主屋と同時か)
内塀					新築	(当初は垣根、数年後に築造)
田舎家					旧主屋古材を再利用し新築	(当初は東向き、旧主屋の位置)
蔵	「文庫蔵」「米蔵」	「道具倉」「通り」「米倉」「材木部屋」を増築し全体で1棟とす	〃	〃	文庫蔵、米蔵、道具倉の一部を北西に曳家か	位置変更、大きさ縮小
地の神社	「稻荷神、老主神、壺神」	〃	〃	〃	北西に曳家、外塀に接続	位置変更
味噌倉 米倉	「雑蔵」	〃「味噌倉」「口倉」「薪置場」	〃	〃	やや北に曳家か	位置変更、大きさ変更なし
旧米蔵	「米蔵」	〃「穀物倉」	〃	〃	解体	(現主屋・隠居の位置)

家相図内の書込を「」で示す。変化のあった箇所を記し、〃は左列と同様の位置、形状であることを示す。

#### 家相図と現状の比較・照合

### 3. 高林家住宅のデザインの分析

#### 3-1. 高林兵衛「ノート」に見る大礼博「民藝館」の構想

高林家には、高林兵衛のノート(以下「ノート」という)が所蔵されている。これは1928(昭和3)年の大礼博「民藝館」の構想図である。「民藝館」は、民藝運動の具体的成果が建築と什器によって総合的に初めて示されたものとされる。大礼博終了後は、大阪郊外の山本為三郎別邸内に移築・改造され「三國荘」となった。兵衛は「民藝館」の資材や職人の手配を行ったことが柳の文章からわかるが、「ノート」からはその設計も行っていたことが読み取れる。「ノート」に記された図は高林家主屋と意匠的に共通する点が多く、その分析を行った。

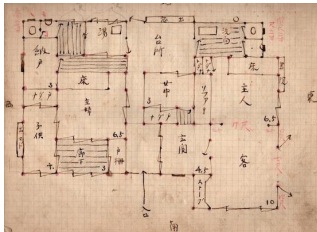
「ノート」は、1)平面、2)外観、3)各室内装、3-2)天井・建具のパターン、に大別することができる。全体は前半、後半に分けられ、それぞれ1)2)3)を含み、2度にわたって検討が行われている。特に各室内装は全体のおよそ2/3を占め、強い関心を示している。

1) 平面は、客間と主人室、婦人室と子供室を、中央の土間(通路)で分け、機能上のつながりに配慮しながら、各自が独立した部屋をもち、食事や就寝のための共有空間がない。従来の和室を中心とした小住宅には見られない構成であり、ほとんど前例のない平面と考えられる。

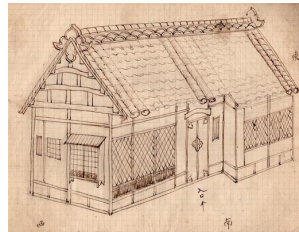
2) 外観では、切妻屋根の棟瓦と妻面の梁と束の構成が特徴的である。妻面の構成は「民藝」の創意と言える。

3) 各室は2面ずつ立体的に描かれている。客間と主人室は、丸柱と袖壁の区切りのみで連続し、椅子座の洋室と畳座の和室が視覚的、空間的に共存する試みである。実施段階ではここに段差が設けられたことも重要である。主人室にはソファが構想され、付書院が高い位置にあることも、椅子座と畳座の共存が考慮されたものであろう。主婦室では、主人室とは異なる意匠の床の間が設えられた。和室を中心としながらも開き戸が多く用いられ室の独立性

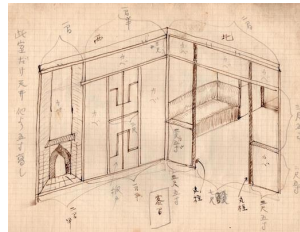
を保つ。主要な室だけでなく、副次的な室も描かれ、特に台所への注力は生活と機能に対する関心がうかがえる。細部では各室とも天井と建具に強い関心が示され、特に卍崩しは様々なパターンが考案されている。後に「民藝」を象徴する意匠となるもので、「ノート」の構想はその原点と位置付けられる。



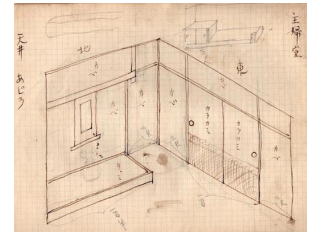
平面図



外観（西面・南面）



客間



主婦室

### 3-2. 主屋・隠居について

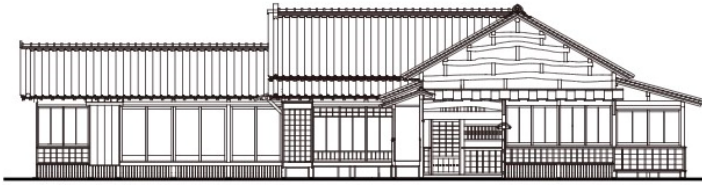
主屋は、1929(昭和4)年2月に高林兵衛の構想・設計により、上棟したことが棟札から明らかになっている。

南側中央に玄関を開き、その東側に12畳居間、西側に8畳座敷を配する。居間は北側の台所とハッチで接続し、東側にはポーチと呼ばれる1段下がった空間が付属している。食事も団欒も居間で行われ、家族本位の住宅として設計されている。玄関、座敷の北側には中廊下が通り、その北に女中部屋、洗面・脱衣室・浴室を配する。廊下は西側の隠居と呼ばれている8畳と4畳からなる棟に続く。隠居は主屋と一体で使われることが想定されており寝室に当てられていた。

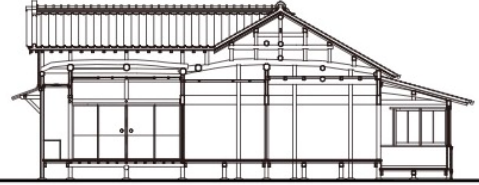
南側は切妻屋根の妻面を見せ、曲がった梁がかかり、その上下を互い違いに束が配されている。棟には特異な形状の鬼瓦を載せ降棟がある。入口と開口部上部には板を大和葺にした庇が付く。これらの立面は「民藝館」と特徴が一致している。

居間では指鴨居とし、化粧梁を渡し根太天井に類似した表現とするのに対して、座敷では長押を廻し、格縁を卍崩しに組んだ天井としている。玄関を挟んで居間と座敷の性格を独創的な意匠で表している。居間においては、建具に卍崩し、檜垣、斜め格子の意匠が見られ、いずれも「民藝館」と特徴が一致し、民藝のボキャブラリーともいえるべき象徴的な意匠である。座敷では、大きな丸い引手を持ち、腰下の色が変わる襖が特徴的である。台所では調理器具が当初から電化されていた。ハッチの台所側は天井まで達する食器棚となり、これらが居間に隣り合う台所を実現している。「民藝館」の台所が土間であったことと比べるとはるかに近代的な計画であった。室内木部には漆が塗装され、天井やドアの板には合板が用いられる。いずれも浜松を拠点とする日本楽器製造(現ヤマハ)の技術と製品と見られる。いずれの部屋でも照明器具と家具が民藝同人の手によってデザインされ、民藝の美学を示す空間が実現している。

主屋は、高林兵衛と民藝同人により民藝の意匠で実現した最初の常住の住宅である。ここでは前年の「民藝館」に続き「民藝調」の基本言語が出揃っている。中廊下型の平面をもつ機能重視の構成で、特に居間と台所をハッチでつなぐ点や、畳の居間と椅子座のポーチを段差で区別する点など、他事例と比較しても先駆的といえる。また、内装における合板の使用や、台所の電化もきわめて早く、日本近代住宅史上重要な事例である。



南側立面図



断面図



居間展開図



古写真（建設当初）



座敷展開図



古写真（居間）

### 3-3. 田舎家について

田舎家は、旧主屋を解体し、その一部古材を利用して1931(昭和6)年に建設された。

南面する座敷(本席)9畳と次の間(囲炉裏の間)8畳を中心とし、東側に土間と台所、西側に裏口を付属する。座敷の床の間は、昭和8年から12年頃までに再整備時に増設されたと考えられ、位置変更を経て田舎家茶室としての体裁を整えたと考えられる。

座敷は長押を廻し、竿縁天井である。落掛ではなく無目と長押がそのまま廻る。次の間は指鴨居とし、化粧梁を十字に渡し竹簀子天井とする。座敷では炉を、次の間では半畳大の囲炉裏を設けるが、これらはともにコンクリート製である。いずれの室においても、木材は古材と新規材が混在し、材種も広葉樹と針葉樹が混在している。古材は古い仕上げが残るものを厳選して使用し、前進の旧家の古材であることが明らかなのは、次の間で東西に渡された化粧梁と、台所で東西に渡された化粧梁である。これらは旧家解体前に撮影された写真において十字に交わった材であり、下の材が次の間で、上の材が台所で使用され、両材の交差部における上の材の欠込を利用して照明が仕込まれている。次の間、土間・台所の周囲の太い柱や、土間の板等も旧家の由緒を物語る古材と見られる。建具も旧家からの転用が明らかなものがある。南面する障子は、座敷では腰を横棧としたもの、次の間では腰を襷棧としたものが用いられるが、ともに旧家の表座敷と見られる古写真に同じものが写っている。

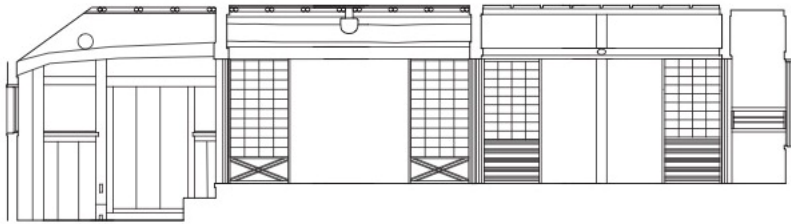
田舎家は近代において民家を再編したもので、一般に「田舎家」は近代数寄者から広まったが、この時期には「民藝」も民家に対する関心を強く示しており、同時代の多義的な民家への関心の中で、この建物は「民藝」と「田舎家」の相関を考える上で中核を担う建築と位置付けられる。



南側立面図



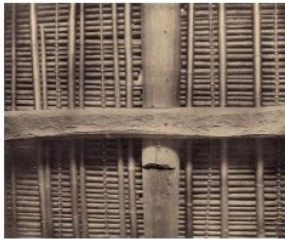
断面図



展開図（左から台所、次の間、座敷）



古写真（昭和12年頃）



古写真（旧主屋の梁）



次の間の梁（横方向）



台所の梁（縦方向）

:それぞれ古写真の梁が転用されている



古写真（旧主屋表座敷）

:左右の建具が転用されている

### （ 発 表 論 文 ）

土屋和男,内田青蔵,小沢朝江,植田道則,新妻淳子「高林邸の建設経緯について 近代における「民藝」と「田舎家」の相関と展開・その1」

『日本建築学会東海支部研究報告集』第61号,2023.2

土屋和男,内田青蔵,小沢朝江,植田道則,新妻淳子「高林兵衛「ノート」に見る大礼博「民藝館」の構想（平面、外観） 近代における「民藝」と「田舎家」の相関と展開・その2」『日本建築学会関東支部研究報告集』第93号,2023.2

土屋和男,内田青蔵,小沢朝江,植田道則,新妻淳子「高林兵衛「ノート」に見る大礼博「民藝館」の構想（各室内装） 近代における「民藝」と「田舎家」の相関と展開・その3」『日本建築学会関東支部研究報告集』第93号,2023.2)

植田道則,土屋和男,内田青蔵,小沢朝江,新妻淳子,堤涼子「浜松市・高林邸主屋・隠居について 近代における「民藝」と「田舎家」の相関と展開・その4」『日本建築学会大会学術講演梗概集』2023.9（投稿済）

土屋和男,植田道則,内田青蔵,小沢朝江,新妻淳子,堤涼子「浜松市・高林邸田舎家について 近代における「民藝」と「田舎家」の相関と展開・その5」『日本建築学会大会学術講演梗概集』2023.9（投稿済）